第九講その１　哲学論　〈選択肢問題〉

〈正常〉と〈異常〉という区別ほど、ほんとうは多くの難しい問題を含んだ問題であるのに、通常簡単に考えられている区別も少ない。簡単に考えられているというより、すすんで簡単に考えようとしているとさえ言えるほどだ。簡単に考えようとするのは、自分の身を［A］の側に置いて、［B］との間にはっきりした一線を画そうとするからである。そこにあるのは、［C］なものとの区別において自己の［D］なことをうち立てるためだとも言える。そこにあるのは、［E］なものに対する怖れと不安、およびそれらにもとづく排除であろう。

そのわかりやすい例は、〈魔女狩り〉――狭い意味での魔女狩りだけでなく、〈赤狩り〉などをも含めた広い意味での――である。そこでは、人々は自分が魔女（あるいは妖術師）であるとしるしづけられ、見なされることを怖れて、魔女をさがす。あるいは誰か怪しいところのある他人を魔女に仕立てる。〈魔女狩り〉に協力すれば、それも熱心に協力すれば、自分が魔女ではないという証しになるかのように。そういう仕組みあるいは関係のなかでは、魔女の実在性はどうでもよい第二義的なものになってしまい、ただ区別するための記号――いわば内容なき空白の記号――があればそれでいいということにさえなるのである。

（中村雄二郎『術語集』による）

問１　空欄［A］～［E］には「正常」または「異常」という語のいずれかが入る。それぞれ適当と思うものを選んで答えなさい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第九講その2　文学論〈抜き出し問題〉

鶏頭の十四五本もありぬべし　子規

子規の写生句といえば、必ず引き合いに出される代表作である。だがこの句がリアルにひびくのは、それが例えば「素直」あるいは「ありのまま」といった、ある永久不変の写実の原則に従っているからではない。それよりもむしろ、作者がいやしくも花を詠みながら、異彩を放つその形や色には目もくれず、またまわりの景色との調和や不調和にも気を配らず、ただその本数を数えることだけに興味を集中することで、Aいわば花本来の面目をないがしろにし、ひいては花を詠むさいの伝統的な約束をあっさり無視しているからである。そして、意表をつくこの表現の新鮮さが読み手を刺激して、背の高い鶏頭が何本も、いかにも鶏頭らしく無造作に、ぞろりと立ち並んでいるさまを思い描かせるのである。**（第1段落）**

芭蕉の弟子のなかでも、とくに実地の体験からの句作りを重視した方のひとりに、去来がいる。「行く春を近江の人と惜しみける」という芭蕉の句を、「殊に今日の上に侍る」（何といっても作者がその時の実景、実感を詠んだものだから）と弁護したのは彼である。また、

辛崎の松は花より朧にて　芭蕉

について、「是は即興感偶」だからこそいい発句になる――もし連句の第三句目のように「句案に渡る」（あれこれ工夫して作った）のであれば、「第二等にくだらん」と主張したのも、やはり去来である。あとでその議論の話を聞いた芭蕉は、どれも「皆理屈なり」と軽くいなし、「只眼前なるは」、つまり何の計算もなく、ただ目に見えたまま、感じたままを表現したに過ぎないと答えた（『去来抄』）。面白いのは芭蕉の説明が、結果としては去来の見方をそのまま裏付けていることであり、この句はその後、「ありのまま」を詠んだ句の筆頭に据えられることになった。Bだが、この句の眼目は、松が「花より朧」に見えるという型破

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

りの表現の意外さ、新鮮さにある。「只眼前」であろうとなかろうと、そうした情景の印象をたしかに読み手に伝えるためには、誰でもそうしてあれこれと表現自体を工夫する以外に手はない。**（第２段落）**

他にも例えば、

山路来て何やらゆかしすみれ草　　芭蕉

のような句について、江戸の昔から今日に至るまで、「眼前の即興」、「素直な実感」、または「見たまま、感じたまま」といったたぐいの評語が盛んに用いられている。だがある句が実景を詠んだものかどうか、またそのさいに、作者が何の「分別」も働かさなかったかどうか、誰にも確かめるすべはなく、またその必要もない。この句の場合、興味の焦点は、句の中心にどっかりと据えられた「何やらゆかし」の七字――いわばこれ見よがしにさり気なさ、素直さを強調する、逆説的な表現の大胆さにある。しかもこの句の初案は、さらにその点に念を入れて（言い換えれば、作意の見え透くほどあからさまに）、「何とはなしになにやらゆかし菫草」、あるいは「何となく何やらゆかし菫草」となっていた。つまり「素直な実感」を強調する評者たちは、むしろこの字句そのものの示す表情に導かれ、そこから逆に作者の心境なり句作の機微なりを想像しているに過ぎない。この句の狙いはみごとに成功したのである。**（第３段落）**

そしてこの例にも明らかなように、俳句のリアリズムは小説のそれと比べても、はるかに表現の斬新さ、「耳新しさ」に依存する度合が大きい。なるべくイメージ自体に語らせるとはいっても、俳句は字数があまりにも少ないので、小説のようにさまざまな対象、例えばハンドバッグなどを、じっくり詳しく描写している暇がない。いまの芭蕉の句でイメージと呼べるのは、何の形容も説明もない「山路」と「すみれ」だけで、すべてはその両者の組み合わせと、例の七字の働きにかかっている。**（第４段落）**

（川本皓嗣の文章による）

（注）
＊　鶏頭……夏秋の候に、鶏のトサカのような形の真赤な花をつける。
＊＊　去来……向井去来（一六五一～一七〇四）。江戸前期の俳人。芭蕉の弟子。『去来抄』はその主著。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

＊＊＊　辛崎……滋賀県大津市琵琶湖岸にある名勝地。一つ松が有名で、近江八景の一つ。

＊＊＊＊　朧……はっきりしないさまをいう語。詩歌の世界では春にありがちのかすんだ大気を指す。

問１　傍線部Ａの部分について。ここでいう「花本来の面目」とは何を指すか。本文中から五字以内の言葉を抜き出して記せ。

問２　傍線部Ｂの部分について。「この句の眼目」は「型破りの表現の意外さ、新鮮さにある。」と言っているが、第１、第３、第４段落においても、筆者はそれぞれ同様の指摘を行っている。そのおのおのの指摘部分を、句読点ともそれぞれ十五字以内で抜き出して記せ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第九講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●その1の筆者　中村雄二郎＝なかむら　ゆうじろう（一九二五〜）東京都生まれ・東京大学文学部哲学科卒・哲学者。およそ八〇年代から今日にいたるまで入試現代文、入試小論文での登場回数は膨大な数にのぼる。主著『哲学の現在』『臨床の知とは何か』『術語集』『術語集Ⅱ』『問題群』など。『述語集』以下三冊は、学問用語集として小論文対策の読み物にもなります

●その2の筆者　川本皓嗣＝かわもと　こうじ（一九三九〜）大阪府生まれ・東京大学教養学部フランス科卒・比較文学者。とくにイギリス、フランス、日本の詩の比較研究で知られる

●正岡子規＝まさおか　しき（一八六七〜一九〇二）愛媛県松山生まれ・東京帝国大学国文学科中退。俳人・歌人・文学研究者。夏目漱石と同窓。弟子には高浜虚子がいる。主な作品『獺祭書屋俳話（だっさいしょおくはいわ）』（獺祭書屋主人（しゅじん）は子規の別号、別名）『歌よみに与ふる書』『病床六尺』。俳句雑誌「ホトトギス」創刊

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

語句

異彩を放つ＝いさいをはなつ↓きわだった特色をもつ
ないがしろ＝蔑ろ↓軽んじてあなどる
面目＝めんもく・めんぼく↓対面・世間に対する評価・世間から受ける評価
　四字熟語　面目躍如＝めんもくやくじょ↓高い評価通りの活躍をする
意表をつく＝いひょうをつく↓相手が想定していないことをする
無造作＝むぞうさ↓手間をかけないで、大雑把に物事をなすこと
殊に＝ことに↓とりわけ・加えて
発句＝ほっく↓連歌や俳諧（五・七・五＋七・七）の最初の五・七・五。もしくは独立の俳句
筆頭＝ひっとう↓第一番目のもの・代表
眼目＝がんもく↓重要なところ・主眼
分別＝ふんべつ↓道理をわきまえること。常識に従って物事の善悪を判断すること。燃える燃えないのごみの区別は〝ぶんべつ〟です
機微＝きび↓表面からは見えない微妙な事情やおもむき。人情の機微などと使います
リアリズム↓現実主義。通常は「写実主義」と区別なく使われることがありますが、今回の文章では、表面的な見たままを超えた〝深層のリアリズム〟とでも呼ぶべき意味で使われています。心に深く刺さるようなリアルさということです

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第九講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）自分たちと異質なものをハイ除する　①廃　②灰　③背　④敗　⑤排

（イ）異サイを放つこの花の色をめでる　①催　②宰　③祭　④彩　⑤才

（ウ）永遠不変の写実の原ソクに従う　①則　②即　③側　④束　⑤測

（エ）俳句に潜むシ激的表現が心に響く　①梓　②志　③刺　④指　⑤試

（オ）写生句の筆トウと語られている　①頭　②等　③踏　④党　⑤到

（カ）その当時の心キョウはいかほどか想像する　①興　②境　③教　④鏡　⑤況

（キ）言葉では形ヨウしがたいほどの美しさ　①要　②様　③容　④用　⑤洋

（ク）発想の仕方がザン新である　①暫　②斬　③残　④惨　⑤算

（ケ）過去の実績や知名度にイ存している　①依　②伊　③易　④居　⑤衣

（コ）一般的理解とは違う逆セツ的真理がある　①接　②節　③刹　④設　⑤説

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第九講その１　哲学論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

ほんとうは難しい「正常と異常」の区別

対比

敵役＝一般論

「正常と異常」の区別を簡単に考える
自分を「正常」の側に置く
「異常」との区別において自らの
「正常」を証し立てようとする

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《空欄補充》

「正常」か「異常」かの二者択一問題にしぼりました。さて、筆者はこの区別について「ほんとうは多くの難しい問題を含んだ問題である」と考えています。それなのに、〝敵役＝一般論〟の側は「通常簡単に考え」ています。しかも、「自分の身」を「正常」の側に置いて。もう［A］の答えを書いてしまっていますが、「簡単」な方、いわば世間がそうしたがる安易な方、ですから「正常」だという類推は成り立ちます。もう少し慎重に考察するため、第二段落に注目します。一般論にあたる「人々」が「〈魔女狩り〉」に熱心であることが書かれています。「魔女」は異質なもの、「怪しい」もの、「異常」なものです。それとの区別・排除によって自分の「正常」を証明しようとします。こういうわけで、自分の側にあたる［A］と［D］が「正常」、一線を画され排除・区別される側の［B］・［C］・［E］は「異常」と決まります。

模範解答

問１　Ａ＝正常　Ｂ＝異常　Ｃ＝異常　Ｄ＝正常　Ｅ＝異常

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第九講その２　文学論

《本文の対比構造》

鶏頭の十四五本もありぬべし　子規
辛崎の松は花より朧にて　芭蕉
山路来て何やらゆかしすみれ草　芭蕉

これらをめぐって左の対比

主役＝筆者の見解

伝統的な約束を無視・意表をつく・新鮮さ・逆説的な表現の大胆さ

対比

比較相手＝俳句の伝統や約束および一般的論評

写生句・素直・ありのまま・見たまま・永久不変の写実の原則・実景や実感を詠んだもの・即興

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《傍線部言い換え・抜き出し》

比較相手の言葉が入ります。つまり普通、花を詠むなら注目するでしょ、という対象を答えます。さらに「花本来の面目」という問題箇所自体に加えて、〝周辺の表現〟も大事です。すなわち「花本来の面目をないがしろにし」という筆者による否定表現とセットになっていることに注意を払いましょう。こうして「その形や色には目もくれず」が浮かび上がります。もちろん「その」は花のことです。したがって「形や色」が正解です。このように〝周辺の表現の類似（一致）〟は重要な手掛かりになるということを覚えておいてください。

問２《傍線部言い換え・抜き出し》

筆者の主張が入ります。全体の対比構造として〝写実ではなく○○〟の○○に当たるものになります。「型破りの表現の意外さ、新鮮さ」の言い換えを答えることになりますが、ここでも〝周辺の表現の類似〟に気を配ろう。すなわち「この句の眼目は」という主語（主部）に導かれるという点です。第1段落でいうと「この句がリアルにひびくのは」がその主語（主部）です。これの中身・述語（述部）に当たるのは傍線Aと「意表をつくこの表現の新鮮さ」です。傍線部が別の問の答えになることは通常ありませんし、「意外さ」の言い換えということで「意表をつくこの表現の新鮮さ」と決まります。第3段落ですと、「この句の場合、興味の焦点は」が主語（主部）です。これの中身は「逆説的な表現の大胆さ」です。では、同じ構造を第4段落で探します。そうすると主語（主部）は「俳句のリアリズムは」です。これを受けた意外性を表現する述語（述部）は「表現の斬新さ、『耳新しさ』」ですね。さて、このように第1から第4段落まで、少しずつ具体例を変えながらもほぼ同じことを主張しています。段落ごとに輪切りにすると同じ対比構造が繰り返される。まさに金太郎アメですね。もっと難しい文章のときもそうした繰り返しがあるはずだと思い出してください。そうすれば全文の一部始終について理解が及ばなくても、わかるところから拡張し、こういうことを言葉を変えながら繰り返し主張しているだけではないか、と捉えなおせます。実は、あるワンメッセージを言い換えているだけだと。これは難しそうに見える文章を読んでいくときのコツです。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

模範解答

問１　形や色（「その形や色」でも可）

問２　第１段落＝意表をつくこの表現の新鮮さ
第３段落＝逆説的な表現の大胆さ
第４段落＝表現の斬新さ、「耳新しさ」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第九講

（ア）⑤　（イ）④　（ウ）①　（エ）③　（オ）①
（カ）②　（キ）③　（ク）②　（ケ）①　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）排除　（イ）異彩　（ウ）原則　（エ）刺激　（オ）筆頭
（カ）心境　（キ）形容　（ク）斬新　（ケ）依存　（コ）逆説

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。